

## NEWS LETTER

## 女性の性欲は「不健康」？

～セクシャルアイテムの歴史からみえた、作られた女性観～

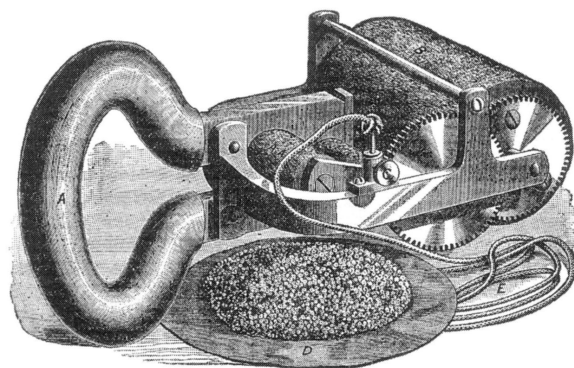
充電式セルフプレジャーアイテム「iroha temari」の発売にともない、バイブレーターの歴史について、西洋、日本の双方から探りました。すると、現代の女性が抱えるセルフプレジャーへの忌避感の源が見えてきました。まずはレイチェル・P・メインズ著、佐藤雅彦訳『ヴァイブレーターの文化史』（論創社、2010）を参考に西洋で生まれたバイブレーターの歴史を紐解きます。

## ヒステリーの治療器具として西洋で開発

電動機械式バイブレーターは、1880年代にイギリスの内科医により「医療機器」として発明されました。女性特有の病気とされてきた「ヒステリー」を治療するため、西洋医学では伝統的に「性器のマッサージ」が必要だと考えられてきたのです。

それまでは医師や産婆の手によって行われていましたが、時間や技術が必要なため、機械化が望まれていました。

右図:19世紀後半にアメリカで大衆向けに売りだされた電動按摩機。按摩と電気療法を組み合わせた「ローラータイプ」



## ヒステリーの語源は「子宮 (hystera ヒューステラ) 」

「ヒステリー」という言葉は、ギリシャ語の「子宮 (ヒューステラ) 」に由来。子宮を持つ女性に現れる、気絶、むくみや充血、筋肉の痙攣、息切れ、食欲や性欲不振などの病的な徴候をひとまとめにした病名で、現在の意味とは異なります。

また、医師たちは「ヒステリーは女性特有の臓器 (子宮) が体内で暴れまわって悪さをする病気」だと信じ、**性器のマッサージでオーガズムを得れば治ると考えていたのです。**この思い込みは、紀元前4世紀から1952年 (全米精神医学会が医学用語としての採用を取り下げた年) まで継続しました。

## 女性のマスターベーション (セルフプレジャー) は“不貞”で“不健康”



古代から19世紀にいたるまで、医師たちは気絶やむくみ (=ヒステリーの症状) の原因を「セックスによって性的欲求が満たされていない」と考えていました。その解決法として勧めたのが「結婚 (セックス) 」。

一方で、**女性自身によるマスターベーションは「不貞」で「不健康」とされ、セックスで解決しない場合は「治療」が必要だとされました。**定期的に通院する女性は、医師たちにとってありがたい顧客でもありました。

レイチェル・P・メインズは「この治療なるものは、性的不満を訴える女性の夫が、自尊心を傷つけられないようにするための防波堤であり、同時に『男が女性の膣に挿入してオーガズムを得ること』こそ正しい性行為のあり方であるとする男性中心主義の規範を護持するための防波堤でもあった」と述べています。

図:20世紀初頭の医療用携帯バイブレーター

西洋では、これまで見てきたようにマスターベーションがタブー視されていたため、それを描いた絵画はほとんど出現しなかったといえます。一方で日本は、浮世絵春画が誕生した当初から題材とされてきました。さらに、その道具である「張形（はりがた）＝男性器を模したセクシャルアイテム」は、女性自身が選び、買い、使うものとして登場しています。

### 奥女中が使う様子、HOW TO本も

張形は平安時代末期にはあり、江戸時代初期に普及したのではないかとされています。男子禁制の中で暮らす大名家の奥女中が使う描写が多く残っています。北尾雪坑齋は、先輩女中がずらりと横並びになった性具を棒で指し、2人の後輩に講義するような様子を「百人一出拭紙箱（ひやくにんいっしゅしきしばこ）」で描いています。女性のマスターベーションの体位に名前をつけて解説した月岡雪鼎「艶道日夜女宝記（びどうにちやじょうほうき）」という本もありました。

また、江戸には「四ツ目屋」という性薬や性具の販売の専門店もありました。

図：田中優子『張形と江戸女』より歌川国貞「春情妓談水揚帳」



参考文献：レイチェル・P・メインズ著、佐藤雅彦訳『ヴァイブレーターの文化史』（論創社、2010）田中優子著『張形と江戸女』（ちくま文庫、2013）

### 明治維新で入ってきた、女性の性欲を認めない思想

江戸時代にあった豊かな性文化も、幕末からの明治維新で一変します。西洋の文明を取り入れようとする動きが盛んになる中、制度や習慣だけでなく、「女性には性欲がない」という思想も持ち込まれたからです。

江戸時代までの日本では、性は「豊饒、豊かさ、祭、聖なるもの」と捉えられてきましたが、これ以降は「邪悪なもの」として位置づけられることになりました。

同時に、遊女や芸者などの女性たちが蔑視されるようになり、その後は法規制によって店自体も姿を見せなくなりました。この価値観は現代においてもみられ、明治から大きな変化が起きていないようです。

### 自分を知ること、自らの性について語ること（iroha広報・本井はる）

現代の日本では、性をオープンに語る女性を「恥ずかしい」「はしたない」と捉えている方も多いと思います。ですが文献を読み解くと、その起源は西洋から輸入された思想であり、江戸社会では女性の性的欲望の存在が当たり前とされていたとわかります。人間の三大欲求の一つである性欲を認め、自分にとってそれをどういう位置付けにするのか、どう表現するのかを考えることは、そんなにはしたないことでしょうか。私たちは、とても自然なことだと感じます。自らの性について考えることは、自らを知る一つの手段だと捉えています。

画像は下記URLよりダウンロードをお願い致します。

[https://www.tenga.co.jp/press/newsletter\\_irohatemari.zip](https://www.tenga.co.jp/press/newsletter_irohatemari.zip)

#### 【本件に関するお問い合わせ】

●担当：本井（[motoi@tenga.co.jp](mailto:motoi@tenga.co.jp)）、西野（[nishino@tenga.co.jp](mailto:nishino@tenga.co.jp)）

●TEL：03-5418-5590 ●iroha公式サイト：<https://iroha-tenga.com/>